# コメント１

舛谷鋭（立教大学観光学部教授）

**舛谷**：立教大学、舛谷と申します。小林先生、お話、ありがとうございました。私、一読者として先生のご本いろいろ読ませていただきました。今日はコメントとタイトルが付けられておりますけども、大変僭越なことでございまして。最後に先生がお話をしてくださった研究の課題というようなところで、どんなような課題が考えられるかということについて、コメントというより話題提供したいと思います。

## 「外邦図」活用私案

私はこれまで軍政史についてちょっと関わってきたものですから、本当に思い付きのようなものですが、地図学の外から幾つか列挙したいと思っております。

活用の私案として一つ考えておりますのは、「東南アジア史の中の日本軍政史研究」ということです。この分野での日本の研究は世界の研究者の中でも非常に高いレベルであるということが知られております。院生レベルの研究でも世界的レベルとして捉えられるというようなことがございまして、軍政史はなかなか研究するにはいい分野ではないかなと思っております。日本人は横文字の他に、当たり前のことですけど、日本語もちゃんとできますので、そこのところはなかなか欧米研究者が及ばないところがあります。私くらいの者でも、例えばシンガポール国立大学にいらっしゃる有名なポール・クラトスカ（Paul H. Kratoska）先生に、「じゃあ、索引をちょっとチェックしてくれたまえ、君」みたいなことで、お役に立てたりするようなこともある分野です。

戦後50年頃に、トヨタ財団が大きなお金を出して、東南アジアの各地域の占領期の資料調査フォーラムというのをやりました。私は、当時南山大学の明石陽至先生がチームリーダーだった英領マラヤ・シンガポール班に加わっておりました。当時、南洋にいた100人くらいの方々のお話を聞き、オーラルヒストリーを記録した証言集を作り、日本語と英語の論文集を作り、それから10年ほどかかりましたが文献目録というのを出したことがございます。論文集は岩波で、あとは龍溪書舎です。

それから「観光研究としてのダークツーリズム」。私は今観光学部におりまして、観光のテーマも持っておりますけれども、観光研究としては、軍政からの延長線上として、ダークツーリズムというテーマに非常に関心を持っております。これは昨年度末の流行語大賞の候補にもなったので、最近知られてきているものではあるのですが、光を観る観光ではなくて、死、悲劇、暴虐などという影を観ることで、教育であるとか、承継目的というようなことで注目されている分野でございます。

そして「多民族アジア世界の中の近現代文学研究」。私のもともとのコアな研究は東南アジア文学です。お前は何をやっているのだという感じですけども、向いている方向は大体一緒です。多民族アジア世界の中の近現代文学研究というようなことで、日本の戦争を題材にしている。私の場合は主に華僑・華人の文学なのですけども、そうしたものからどういうふうに外邦図の活用を考えていけるかというようなことを、ちょっと考えてみました。

## 日本軍政史の視点

軍政史の視点ですが、軍事情報として作製経緯そのものが、軍政史として非常に貴重であると、小林先生のご本にも幾つかその例が書いてありました。私は地図学の外におりま

すので、「鹵獲（ろかく）」、「押収」という「強奪」ですとか、過去の製作時における反日感情の話であるとか、そういうところに非常に関心をそそられました。

それから、近代資料化後も続く当該国の各様の抵抗感ですね。これは今では近代資料であって、軍事情報ではないのですけども、一部そうではないと思われている節もあります。そもそも秘密測量だったのではないかというような測量の経緯や、これは中国ですけども、地図公開の国内法の規制、それからネット公開への躊躇ですね。韓国でしたか、ちょっと思っているのではないか。そういうようなことは歴史認識の問題とも関わるのかもしれません。やはり軍事史ではなく軍政史となった場合には、その歴史認識の問題もやはり絡めて考えていかなければいけません。そうした中で、この近代資料化後の各様の抵抗感というものも、作製経緯そのものとともに重要になってくるのではないかというふうに考えております。

## 観光研究の視点

一方で、観光研究の視点としてなのですが、観光というのはコミュニケーション理論的にホスト側からゲスト側に観光資源が流れるのだというふうに私は考えております。非常に卑近な例かもしれませんが、浅草近辺を歩くときに、歩いている場所の江戸・明治・現代の地図の画面を切り替えてくれるスマホのアプリに「下町そら散歩」というのがあります。こういうものの製作過程ではGISを活用しているのだと思いますが、外邦図には緯度・経度が記されていないものが多いため、そう簡単にGISにペタペタ貼っていけるということはないのですけれども、ホスト側からゲスト側に流れる資源化の仕掛けとして、こうしたAR（Augmented Reality）というようなものが考えられるのではないかと思っております。

それから、観光史の分野では、「遊歴」を装った測量というものが相当行われておることに興味を持ちます。軍事行動もやはり人の移動ですから、外邦図を帝国日本の観光の一種と捉え、「遊歴を装った測量」と位置づけていくことができるのではないかと考えます。

それから、先ほどもちょっと出ておりましたが、観光資源の発掘経緯ですね。広開土王碑や白頭山など、そうしたものがこの外邦図に含まれているときがありまして、そうしたことがどういう経緯で、いつ、何のために行われたというようなことは、観光史の中で視点として持っておいていいのではないかと思っております。

## 文学研究の視点

それから、文学研究のほうです。早くに亡くなった本学文学部教授の前田愛氏の文学的都市論、前田先生は明治を復元するというようなことをやっておられましたが、それにならって戦前期を舞台とした東南アジア近現代文学作品による『幻景の街』の復元ができないか。今、実際に手掛けておりますのは、蘭印を背景としたプラムディア・アナンタ・トゥールの「ブル島四部作」というのがあります。どのようなものがいわゆる前田先生の明治文学に当たるのかは、私の共著である『東南アジア文学への招待』（段々社、2001年）からピックアップできますので、基礎的作業としてそうしたものを始めております。まず、その対象になる、例えば蘭印ですね、植民地時代の扱われた文学を読み、地名を抽出して、つづりや場所を確認する。それをGISのデータベースに蓄積をして、それと外邦図を、先ほどのARの江戸期、明治期の地図ではありませんけれども、近代的な歴史地図として参照しながら、この「幻景の街」の復元というようなものを進めていけないかということを、今ちょっと思案しております。

## 立教所蔵の『外邦図』の拡張の可能性

先ほど申し上げたように、ある時期に軍政史について関わったことがありまして、その

ときの仲間が防衛研究所等にもたくさんおります。この戦史研究センターであるとか、地域研究部とのネットワークというのがまだちょっと生きておりますので、これを使って、兵要地誌とか、陸図・海図などの所蔵資料を使うことができないか、考えております。

それから、アジア歴史資料センターがよく知られているように、かなりのデータを今、電子化してネットに出しています。以前は防衛研究所の資料というと、実際その場に行って、カードのボックスを繰って請求をしてもらい、コピーを頼むと2～3週間かかるような場所だったのですが、2000年代に入ってから公開状況の次元が違ってきております。

今では閲覧室の中に端末もあり、原図が貼ってあるものもあります。目録をクリックするとそれが大きくなって見られるというような状況もありますので、そのような所蔵資料の活用をできないか。

ただ残念ながら、いわゆる防衛省の外局に当たる防衛研究所の戦史研究センターにしろ、地域研究部にしろ、外邦図に関心を持って何かに使用したり、それについてすぐに土地勘があって話ができたりする人がいないのです。結構時間をかけて、つても相当頼って探したのですけれど、話は聞いてくれるのですがなかなか関心を持ってもらいにくいというようなことがありまして、意外にここは手こずっております。

それから、小林先生のご本にも少し触れてあったところがあったと思いますけども、戦史叢書の引用資料への個人情報保護の解除状況というのもだいぶ改善されてきております。そうしたことも考慮に入れながら、「もう駄目だ、見られないんだ」と決めつけないで、少し進めていけたらいいのではないかと思います。

そして、せっかく外局のほうにかなり太いパイプがありますので、内局に当たる陸上自衛隊のほうもちょっと手を出してみようかなと思い、東立川駐屯地の地理情報隊の所蔵外邦図についての調査・閲覧について、外局の指導に従って東立川駐屯地の広報班とのやりとりを今やっております。今日までに少し回答が出ればいいなと思って、少しさかのぼってやっていたのですけど、残念ながら回答は出ていません。防衛研究所というと防衛省の中でのつながりが非常に強いと思うのですけども、ちょっとそうではないようで、東立川駐屯地の反応を防衛研究所のほうに持っていって、「こう言われたんだけど、どう思う？」みたいな形で話をして、「大学や民間で駄目ならば、防衛研究所の中からの要請だったらどうですか」などと、話を進めています。

しかし、あくまで感触なので後で訂正しなければならないかもしれませんが、地理情報隊は外邦図を現用資料というふうに思っているのではないか。これは僕もそう思いましたし、それから防衛研究所の人たちもそうではないかなと言っています。彼らが軍事情報として、これを現用資料として使っていればこそ、他の外邦図による補完をするということは、彼らにとっても意味があるわけです。外邦図の研究が進んでいって、例えば地理情報隊所蔵の外邦図の欠けた部分を所蔵している場所をちゃんと伝えてあげれば、この地理情報隊の所蔵外邦図のほうの扉も多少は開くのではないかというのが、私と、外局に当たる防衛研究所のほうとの現時点での意見でございます。

この辺については、小林先生のご著書にも「ある事情により移管された」というような記述もあったと思います。今私が述べました、軍事情報として活用していればこそ、他の外邦図による補完が必要なのではないかということについて、ご意見を賜れればと思います。

私からは以上です。

**上田**：今の小林先生の報告および舛谷さんのコメントで事実確認などありましたら、お願いしたいと思います。

**小林**：外邦図もいろんな角度から見られるのだなと思って、すごい興味深く伺いました。

陸上自衛隊の立川の地理情報隊ですが、ここの隊長と会ったことがあり、現物も見せてもらいました。そこで隊長に、「これに軍事的価値はありますか」と聞いたら、「ないです。あるとすれば地名ぐらいです。あとはもう地形とかそういうものは全部全然価値はない」と。今は衛星写真とか空中写真がありますし、例えばミサイル飛ばしたりとか、低いとこ飛んだりとかには標高データみたいなやつが大事になってくる。要するに上のほうのレベルの人はそう思っているのですが、その地図を実際管理している人たちは現用の地図だと思っている可能性はあると思います。そういう感じがいたしました。

それから、「遊歴を装った測量」というのもなかなか興味深いのですが、実は観光に関連して言いますと、例えば日露戦争とか日清戦争の後に、戦跡巡り用の地図がいろいろ刊行されています。しかも偕行社のような半ば公的な機関が刊行しておりまして、息子さんとか、父親とか、おじいさんが戦ったところを巡り歩くような地図が再生産されている。そういう地図は結構ありまして、売りにも出ています。

私は今まで新しい地図作ることばかり考えていたのですが、そういう角度から地図を見直してみるというのも大事かなと思いました。

**舛谷**：ありがとうございました。

**上田**：どうもありがとうございます。後の全体でのディスカッションで、大きなレベルでの質問をいただきたいと思います。それでは小林先生、舛谷さん、どうもありがとうございます。